

企業制度的日常における「私」の生成
—『私』を生きる技法』としての芸術実践—

所属：先端芸術表現研究領域

学籍番号：S1323924

氏名：平岡 美由紀

論文要旨 ——制度的日常の中で「私」を生きることは可能か

現代の制度的日常——とりわけ企業という規律化された構造の中で、人はしばしば役割の言語をまとい、評価に応答し、再現性あるふるまいを繰り返すことが求められる。そうした制度的日常のなかで、語れなさは沈黙として無化され、揺らぎは未熟さとみなされる。制度的日常は私たちを機能に変え、表現は成果へと変質し、「私」は内部に押し込められてきた。

けれど、語ることでできない違和感や感覚、逸れてしまった言葉の断片のなかに、もう一度「私」が立ち上がる場はないのか。芸術という営みは、そうした揺らぎや逸脱、語られなさに対して、制度を破壊することなく、ただ共に留まる場を開こうとする力を持ちうるのではないか。

近年、芸術は組織開発や人材育成の領域で、創造性やイノベーションの「手段」として注目されている。しかし本研究が志向するのは、芸術を「役立つもの」としてではなく、むしろ制度に収まらないもの——組織的役割や効率性に収まりきらない、自己内面的欲求からくる、ありたい「私」、ありえたかもしれない「私」——が制度の中にとどまり続け、「私」を生きる実践＝生き方の技法として再定義することである。

この目的のために、本研究では二つの異なる芸術実践を自ら設計し、制度の中で展開した。ひとつは、象徴的メディアである「面」を用いた少人数型ワークショップである。面の制作・装着・語りなどを通じて、「私」の出現を促す実践を構築した。もうひとつは、大人数型のアートプログラムであり、登壇者による語りと問いの挿入を通じて、制度的日常そのものに揺らぎを生じさせる場を開いた。

また、本研究の分析には、ポスト質的研究の視座を採用した。芸術実践の場で生じる感覚的・身体的な経験により「私」は流動的に立ち現れるが、従来の質的研究では捉えにくい。これを補うのがポスト質的研究であり、言語中心主義や方法の固定化を批判し、研究を創発的な実践として再構築する立場である。本研究では、語られない感覚や非言語的現象を扱う芸術実践のため、ポスト質的研究の視座から「方法なき思考」の姿勢を導入し、生成過程を柔軟に記述・分析した。

本研究は、芸術を「表現」でも「課題解決ツール」でもなく、制度の中で「私」を生きる技法として捉え直すものである。企業という合理性に貫かれた制度に、感情・感覚・揺らぎが居合わせる場を開くこと——そこに、本研究の問いと構想と挑戦がある。